

(4) 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校／附属鎌倉中学校

1) 附属鎌倉小学校における海洋教育のカリキュラム・全体プログラムについて

1-1) 海洋教育の位置付け

本小学校では、全学年を通して、「海の総合的な学習」として海洋教育を実施しており、これを教育の柱としている。海に近接していることから海洋生物とのふれあい、漁業体験や乗船体験等を通じて総合的な学習を行っている。校内における通常の体育科の指導以外に、海における授業の実施を通じてより良いスポーツ環境をつくることを目的としている。

1-2) 海洋教育の概要

全学年共通の活動として、材木座海岸へ海浜遠足を実施している。これに、3年生から4年生は真鶴合宿を行い、海洋生物や海について学ぶ。また、3年生から6年生はウィンドサーフィン¹⁶を体験する。4年生は日本丸海洋教室への参加として横浜港周辺に行っている。5年生には千倉臨海学校を設定している。

1-3) 対象と運営

小学1年生から6年生まで全学年を対象としている。1学年120人であり、6学年合計720人になる。この運営に教員全員が関わる。

1-4) 施設・学習の場

横浜国立大学教育人間学部附属理科教育実習施設¹⁶を利用している。また、鎌倉材木座海岸を主として、千倉、真鶴等でも実施している。

1-5) 費用

本カリキュラムにおいて、平成22年度における予算額は2,200万円である。その財源は日本財団からの助成である。

1-6) これまでの課題

総合的な学習の時間が減少した一方で、教科に組み込みたいができない状況にある。そのため行事等を利用した総合的な学習の時間、あるいは体育指導の中で行っている。

また、本校の取り組みは保健体育に偏っていると思われるので、理科や社会科等といった他教科の活動もさらに展開できたらよいと思っており、教科の単元の中にどう組み込むのか考えたほうが良い。

2) 個別カリキュラム・プログラムについて

2-1) ウィンドサーフィン

2-1-1) 概要

本プログラムの狙いは、海の総合的な学習の目的に準ずる。ウィンドサーフィンを体

¹⁶ 平成23年度より同大学院環境情報研究院の附属施設になる。

験して海と風の関係等を学ぶ。体育指導の一環として実施している。平成 22 年度では 6 月から 11 月にかけて各学年・各クラスに分けて、クラス毎に 2 回実施した¹⁷。

事前学習としてウィンドサーフィンの経験者から講義を受講し、陸上での練習を経て、ウィンドサーフィンの実践学習を行う（写真 2-15）。

実施に当たっては、特定非営利活動法人チャレンジスポーツクラブ¹⁸の協力も得ている。



写真 2-15 ウィンドサーフィンの様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」Vol.4 ～ういんどさーふいん～」より

2-1-2) 対象と運営

小学 3 年生から 6 年生までを対象に、1 学年 120 人、合計 480 人である。

2-1-3) 教材・施設

教材として、ウィンドサーフィン、セイル、ウェットスーツ等が挙げられる。

2-1-4) 費用

日本財団から得た助成金を配分している。

2-1-5) 外部との連携

ウィンドサーフィンの指導は、鎌倉市内の特定非営利活動法人チャレンジスポーツクラブが行っている。また同法人は笹川スポーツ財団からの支援が行われている。

¹⁷ 平成 22 年度における各学年各クラスの実施日は以下の通り。3 年生 1 クラス：6 月 4、7 日、3 年生 2 クラス：6 月 22、24 日、3 年生 3 クラス 6 月 8、28 日。4 年生 1 クラス：10 月 13、14 日、4 年生 2 クラス：10 月 15、19 日、4 年生 3 クラス：9 月 21、22 日。5 年生 1 クラス：10 月 27 日、11 月 2 日、5 年生 2 クラス：9 月 10、14 日、5 年生 3 クラス：9 月 15、29 日。6 年生 1 クラス：7 月 1、2 日、6 年生 2 クラス：7 月 5、6 日、6 年生 3 クラス：7 月 7、8 日。提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」Vol.4 ～ういんどさーふいん～」より。

¹⁸ 海遊びのすばらしさと、大自然にふれあう感動を多くの子どもに伝えることを目的に活動をしている。特定非営利活動法人チャレンジスポーツクラブ Web サイト（<http://www.7seas.jp/npo/>）より。

2-2) 海に関わるその他の活動

既に取り上げた活動の他に、全学年共通の活動として「海の総合的な学習」を位置付けており、由比ヶ浜、材木座海岸海浜への遠足を実施している。日本財団から得た助成金を配分して実施している。また、一部学年を対象に真鶴合宿、日本丸海洋教室も実施している。

1年生は、海を感じることを目的に、砂遊びやスケッチを行う（写真 2-16）。



写真 2-16 1年生の学習の様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」 Vol.1 ～かいひんえんそく」より

2年生は、海岸清掃、生物観察、砂遊びを実施する（写真 2-17）。



写真 2-17 2年生の学習の様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」 Vol.1 ～かいひんえんそく」より

3年生は、波打ち際の探索、砂の造形に取り組む（写真 2-18）。



写真 2-18 3年生の学習の様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」 Vol.1 ～かいひんえんそく」より

4年生は、砂浜での学級企画を検討し、実施する（写真 2-19）。



写真 2-19 4年生の学習の様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」Vol.1 ～かいひんえんそく」より

5年生は、道具を持たずに海岸にあるものを利用して砂山を作る（写真 2-20）。



写真 2-20 5年生の学習の様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」Vol.1 ～かいひんえんそく」より

6年生は、ビーチサッカーやビーチバレーボールを行いつつ、砂に触れ、海を知る（写真 2-21）。



写真 2-21 6年生の学習の様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」Vol.1 ～かいひんえんそく～」より

真鶴合宿（2泊3日）として、小学3年生、4年生を対象に、実施している。その概要として、漁業体験（定置網の体験・アジの干物づくり）、海の生物観察（プランクトン採取・観察、かに釣り）、真鶴小学校との交流、郷土資料館の訪問等を行い、生活の中の一部として海を感じることを目的に実施する（写真 2-22）。



写真 2-22 真鶴での学習の様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」 Vol.2 ～まなづるのがっしゅく～」より

日本丸海洋教室として、小学4年生を対象に実施している。その概要として、日本丸の見学の他、登ししょう訓練、甲板磨き、防火避難訓練、カッターボート訓練等を体験する（写真 2-23）。



写真 2-23 日本丸での学習の様子

提供資料「海洋教育記録集「うみ+子ども」 Vol.3 ～にほんまるかいようきょうしつ～」より

3) 附属鎌倉中学校における海洋教育のカリキュラム・全体プログラムについて

3-1) 海洋教育の位置付け

本中学校では、海洋教育としての学習は特に設定していないが、ビーチコーミングを通じた環境教育を実施している。

3-2) 海洋教育の概要

本プログラムでは、身近な生物の多様性や環境による変化等、環境問題に対する関心の向上と身近な環境を生かした継続的な学習環境を行い、採取した動植物を分類し、標本を作製する。

3-3) これまでの課題

生徒は幼少期より自然にふれてはいるが、そこから何かを得るという経験が不足しているのが現状である。また、海は近いが海洋生物の名称等に関する知識がほとんどない。

一方で学校側には、海、山両方に隣接しているため多くの生物が棲息するが、生物についての知見がない。

4) 個別カリキュラム・プログラムについて

4-1) ビーチコーミングを通じた環境教育

4-1-1) 概要

ビーチコーミングによって集られたごみについて調べ、海洋汚染や環境問題を解決するにはどのようなことが必要か学習する。

総合的な学習の時間に組み込み、事前学習、講演会、ビーチコーミングを実施している。教室での問題解決学習として授業時間を 20 回¹⁹設定している。うち 2 回を講演会に割り当てている。事前学習では、海洋生物・投棄・海草・環境問題の 4 テーマに分かれ、海岸に過去に漂着したものについて調査し、そこからビーチコーミングの意味等を学ぶ。また、漂着物から理解できる周囲の環境問題や自然の現象等についても学習する。

海岸におけるビーチコーミングについては、授業時間 2 回分を 2 度実施する。

4-1-2) 対象と運営

中学 3 年生環境領域選択の生徒を対象とし、40 人が受けている。運営は、環境領域担当教員が携わっている。

4-1-3) 教材・施設

材木座海岸におけるビーチコーミングによって収集されたゴミが教材となる。

4-1-4) 費用

本プログラムにおける実施費用は 40 万円であった。その財源として(財)日産科学振興財団から助成金を得た。

4-1-5) 外部との連携

事前学習の講演会は、地元のビーチコーミング活動家を招いて行った。また、材木座海岸では、ビーチコーミングや海洋環境を専門とする複数の講師が指導する中で、実施している。

4-1-6) これまでの課題

フィールドワークが環境領域選択の生徒に限られることから、学年全体や全校規模での実施ができる環境を整備する必要がある。

また、地域の環境問題を考える発信点となるような生徒、職員の意識の向上が必要で

¹⁹ 1 授業時間 50 分 1 回としてカウントしている。以下、中学校ではいずれも同様。

ある。

4-1-7) その他

環境教育としての海岸の清掃は環境問題の関心を向上させることに有効である。

5) その他の課題

本小学校と本中学校の連携、また本・小中学校と横浜国立大学統合的海洋教育・研究センターとの連携推進が課題として挙げられる。

(5) 琉球大学教育学部附属中学校

1) 海洋教育のカリキュラム・プログラム全体について

1-1) 海洋教育の位置付け

本プログラムは琉球大学教育学部「海を活かした教育に関する実践研究」において、「海を活かす教育－家庭科食教育への実践に向けて－」のテーマの中で、小中大連携の一環として実施している。

1-2) 海洋教育の概要

新学習指導要領の「食生活と自立」における、「日常食の調理と地域の食文化」を踏まえ、これに「身近な消費生活と環境」と関連付けて内容を構成する。1年生では家庭科の授業時間を年間35回設定しており、そのうちの14回を本プログラムに配分している。

2) 個別カリキュラム・プログラムについて

2-1) 家庭科食教育への実践

2-1-1) 概要

本校の家庭科において、食教育の体系化と食教育の中で活用可能な海洋資源の教材開発を目的とする。

本プログラムの単元計画では、授業時間を14回とし、事前学習において栄養バランスと調理法に関する学習、及び調理計画の指導を行っている。これを踏まえて実践として調理を行い、事後学習を用意している（写真2-24）。食の素材として島嶼県、島嶼国としての食資源である「魚」を教材として用いる。沖縄県としても我が国としても身近な食材であるとともに、現在の我が国において給食での残食率が高いもの（他に、豆、野菜が挙げられる）であることが理由である。



写真 2-24 調理学習の様子

（提供資料より）

2-1-2) 対象と運営

中学1年生を対象とし、人数は4クラス159人が受けている。運営は、家庭科の担任教諭1人で実施している。

2-1-3) 教材・施設

教材として、魚、調理器具等を利用し、教室・調理室で実施している。

2-1-4) 費用

琉球大学教育学部「海を活かした教育に関する実践研究」の一環として、日本財団による助成の配分によって実施した。食材費、調味料費等に支出している。

2-1-5) 外部との連携

琉球大学教育学部と連携して実施している。

2-1-6) これまでの課題

各生徒の家庭との連携が重要である。

2-1-7) その他

今後は公立校でも実施できるようにプログラムを展開していく予定である。ただし、導入部分での関心を高める仕組みや家庭との連携をさらに工夫する必要がある。

(6) 私立逗子開成中学校

1) 海洋教育のカリキュラム・プログラム全体について

1-1) 海洋教育の位置付け

創立当時から学校の前面に広がる逗子湾を利用した教育を行っている。現在では、海洋教育を本校教育の大きな柱の一つと位置付けている。海洋教育は、昭和 61 年における本中学校再開以来、継続して本中学校の全生徒を対象に、OP ヨット製作²⁰、OP ヨット帆走、遠泳を体験するカリキュラムとなっている。

1-2) 海洋教育の概要²¹

海の上では、全てのことを誰の援助もなく自分の力だけで大自然に向かうこと、そして自立することを学ぶ。このような海での経験を通して、日本の中からの視点だけではなく違った視点で国際社会を意識し、世界へと生徒の心が広がることを狙っている。また、世界に開けた海を利用した海洋教育により、強靱な肉体と精神力を養うことを目的としている。

OP ヨット帆走、遠泳等を実施するときは学年担当の教員、体育科の教員、海洋教育担当の教員が協力し、救助艇や救命要員を配置し、安全を第一に実施している。

1-3) 対象と運営

対象は中学校の全生徒である。海洋教育については、技術・家庭科主任教諭の他に海洋教育専従として事務スタッフ 3 人を抱えている。なお、専従スタッフは海洋教育センター²²の管理事務も行う。

1-4) 施設・学習の場

海洋教育センターは 88 人が宿泊可能な施設となっており、地下にある艇庫からは直接逗子湾に出ることができる。

1-5) 費用

海洋教育の専従事務スタッフ 3 人分の人件費、及び海技免許の取得費・更新に伴う費用がかかる。

2) 個別カリキュラム・プログラムについて

2-1) OP ヨット製作

2-1-1) 概要

OP ヨット製作は技術・家庭科の通年実習として組み込まれて実施しており、部品の組み立てから艀装品の取り付けまで 6 段階の内容を持っている。

本プログラムでは、生徒たちをいくつかのグループに分け、複数のクラスのメンバー

²⁰ OP は Optimist の略で全長 2.31m、全幅 1.13m の小さなヨットである。

²¹ 本項は、逗子開成中学校／高等学校 Web サイト (<http://www.zushi-kaisei.net/blog/diary.cgi?page=1&field=9>) も参照のこと。

²² 同センターは平成元年 11 月に竣工した。

が同じ艇を交代で製作する「共同作業」という形で進めている。

完成した OP ヨットは5月中旬に進水させる。この際に進水式を行い、シャンパンをかけて逗子湾に船を出す。

完成した OP ヨットの縁には製作を担当した生徒の名前を記しており、現在までの 20 年間で製作されたヨットは 143 艇にのぼる。

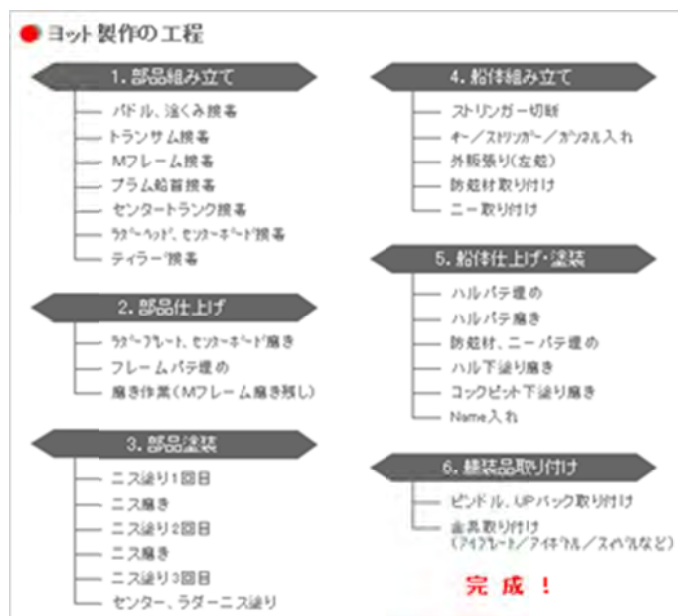


図 2-2 ヨット製作の工程

逗子開成中学校／高等学校 Web サイト(<http://www.zushi-kaisei.ac.jp>)より

なお、OP ヨット製作と並行して以下の内容の海洋についての講義を行っている。

- (a)ヨットはなぜ走るのか：(帆走理論) - 自然科学の視点 -
- (b)ロープワーク：(実技基礎) - 生活の智恵と技術 -
- (c)海上での安全：(安全確保) - 命・責任・協力 -
- (d)今世界の海で：(環境問題) - グローバルな視点 -

2-1-2) 対象と運営

中学 1 年生を対象に、平成 22 年度においては 8 クラス計 282 人が受ける。

2-1-3) 教材・施設

教材として、ヨット製作に関わるものやロープ等が挙げられる。また、ヨットの製作は海洋教育センター地階の工作室において、講義については海洋教育センター1 階講義室において行っている。

2-1-4) 費用

OP ヨット製作の材料費として年間 100 万円程度支出している。製作された OP ヨット²³、

²³ OP ヨットは 100 艇余りを所有し、毎年 5 艇ずつ製作している。

さらに救命艇をはじめとする所有モーターボート（開成号 490、グレー30、グレー20、さとかぜ、快風）の維持管理費用及び船検費用を支出している。

2-2) ヨット帆走

2-2-1) 概要

毎年 5 月から 6 月、9 月から 10 月の期間において、年 2 回、洋上でのヨット帆走実習を行っている。

1 年生の前期では、海には出ずに校内のプールを使ったヨットの基本的操作等を学習する。また、この際ヨット実習に対する心構えも学ぶ。1 年生後期から実際の海で帆走実習を行う。帆走実習は海洋教育担当の教員の他、学年担当教員、体育科教員が協力して実施する。帆走実習は海洋教育担当教員を中心として体育科教員、本学高等学校ヨット部が救助艇で常に監視するとともにアドバイスを出し、それに従って生徒は自分の力でヨットを操船する。

3 年生ではある程度スピードを出しながらチーム毎にコースを走るレース形式の実習も行う。

2-2-2) 対象と運営

中学 1 年生から 3 年生までの全生徒を対象とし、平成 22 年度において、1 年生 8 クラス計 282 人、2 年生 7 クラス計 279 人、3 年生 7 クラス計 285 人、合計 845 人が受ける。

2-2-3) 教材・施設

ヨット、構内プール等が教材である。逗子海岸で実施する。

2-3) 遠泳

2-3-1) 概要

本プログラムの目的は、長距離を泳ぐことで水への自信を持たせ、逞しい心と体を育てること、励ましあって泳ぐことで他人への思いやりと協調性を育てることにある。

毎年 7 月²⁴に逗子湾内で約 1,500m のコースを設定して実施する。コースは、海洋センター前の海岸を葉山新港へ向かって出発し、ペースメーカーが 20 分から 25 分で大崎側へ変針する。変針後 5 分から 7 分で再び変針して出発地点である海洋センター前の海岸を目指す。

遠泳当日は体育科教員が中心となり、学年担当教員、海洋教育担当教員、ヨット部員、水泳部員等が協力して実施する。遠泳は 3 年生を 4 班に分け、それぞれの班にペースメーカー（各班に 1 人）をつける。

3 年生においてこの遠泳を完泳するために、1 年生、2 年生を対象として屋外プールにおいて体育科教員による水泳指導が行われる。この水泳指導は 5 月上旬からに開始され 10 月中旬まで続けている。

²⁴ 平成 22 年度は、7 月 12 日に実施した。

2-3-2) 対象と運営

中学3年生を対象とし、平成22年度では、合計277人を対象としている。

遠泳の実施に当たっては、教員を中心に50人から60人の主要メンバーで、以下の構成で実施している。

まず船艇として、本部艇1艇（5人乗船）、救助艇2艇（各2～3人乗船）、監視艇2艇²⁵（各2～3人乗船）、監視及び応援のための手漕ぎボート3艇（各2～3人乗船）が隊列、ライフガード、レスキューボードを常時囲んで並走する。

ペースメーカーとして4人を配置し、コースの誘導とスピード調整のため生徒の隊列を先導する。

水泳部員とライフガード（18人／班）が隊列の周囲を泳ぎ、さらにこれを囲むようにしてレスキューボード（11人／班）が泳ぐ。

この他に、備品係、記録係、陸上本部も設けている。

2-3-3) 教材・施設

船艇の他、毛布、ライフジャケット等を準備している。逗子海岸で実施している。

2-3-4) 費用

遠泳の際に安全監視のために依頼する水泳インストラクター費用、遠泳時に貸し切って使用する海の家を費用を支出している。

2-3-5) 外部との連携

レスキュー人員のうち4人から5人は小田原ライフセービングクラブに対して派遣を依頼する。

3) その他

海洋教育は費用がかかるので援助、助成等があれば利用したいと考えている。5年以上前に神奈川県から海洋教育に対して補助を受けたことがあり、これは材料購入費用に充てた。

一概に海洋教育といっても定義がまちまちで共通の理解ではないのが現状である。当校は海が目にあるため、その海を利用して行う実習を海洋教育と位置付けている。

海洋教育について、本校では現在の社会で足りないものを補うのに必要な授業であると考えている。

²⁵ 以上の5艇はモーターボートである。

(7) 神奈川県立海洋科学高等学校

1) 海洋教育のカリキュラム・プログラム全体について

1-1) 海洋教育の位置付け

「水産・海洋教育」を通して人間性・社会性を育み、専門高等学校としての本校の位置付けと特色ある教育活動の展開への理解を深め、水産・海洋教育へのニーズを広げるために情報発信を行い、専門的な知識・技術を身に付け新しい時代に対応したスペシャリストや海洋関連産業で活躍できる人材の育成を目指す。

神奈川県環境方針を受けて、環境負荷を低減する活動を展開し、人と環境に優しい心を持った生徒を育成する。

実習船等を活用した海洋における体験学習を通して自己の可能性を開拓するとともにキャリア教育を推進し、生きる力を育成する。

心豊かな人間性を育み「開かれた高校づくり」を推進するために海洋に関する学習センターとしての機能を提供する。

1-2) 海洋教育の概要

本校の学期は前後期の2期制で単位制となっており、科目数は51を数え、実験・実習を多く取り入れている。卒業必要単位数は74単位だが、本年卒業生の中には94単位を取得した生徒もいる。

本校は海洋科学科の下に、「一般コース」と「船舶運航コース」を設けているが、両コース共通の基礎学習として、教科「水産」の科目「水産基礎」「課題研究」「体験乗船実習」、教科「海洋科学」の科目「海洋科学基礎」を学校設定の原則必修科目としている。

海洋科学基礎と水産基礎の共通目的として、海洋における様々な体験を通し地球環境を総合的に見つめるとともに、環境問題について考える能力と態度を養うことにある。前期はカッター訓練や湘南丸体験乗船等の海上における体験学習を中心としている。後期は地球温暖化等の環境問題や地震、津波のみならず海洋文化、海洋政策、海洋法等について学習する。

なお現行の学習指導要領では「海洋」の分野がなく「水産」の中の1分野として取り扱っている。そこで本校では教科「水産」の他に教科「海洋科学」を学校設定した。学校設定教科「海洋科学（専門）」における科目はすべて学校設定科目としており、海洋科学基礎の他に「海の生物」「海とバイオテクノロジー」「海洋化学」「海洋環境基礎」「海洋環境探究」「海洋生物飼育」「海とたべもの」「海洋食品管理」「海洋数学」「海洋英語」「海洋文化」「海洋ボランティア」等36科目がある。

教科「水産（専門）」の中では学校設定科目として「マリンスポーツ」「ダイビング」「マリンエンジン」「プレジャーボート」「漁業とくらし」「漁業実習」「フィッシング」等がある。

1-3) 施設・学習の場

本校での教育活動において、特色のある学習施設として、長井実習場、マリンスポーツ実習棟や所有船舶がある。

所有船舶は、実習船として「湘南丸」（646 総トン）、「わかしお」（19 トン）がある。

これにカッター3隻、モーターボート1隻、和船4隻、救助用ゴムボート1隻、水上オートバイ2隻、ヨット2隻を所有している。その他、シーカヤック、ビーチ用車いす、アクセスディンギー等も保有している。

1-4) 費用

県費が財源である。特別な使途として、教職員の研修費用県費分のうち、ダイビング機材として7万円程度を支出している。

1-5) これまでの課題

主な課題として、以下の3点がある。まず、平成20年の開校に際し、現行の学習指導要領との関係で神奈川県教育委員会、文部科学省と様々な検討・議論が行われた。本校では教科「水産」の他に教科「海洋科学」を学校設定した。現行の学習指導要領では「水産」の中には「津波」という項目が入っていないが、実際には少ない量ではあるが教科書に記載されている。このようなギャップをなくしていく必要がある。さらに、現行の学習指導要領に不足しているものとして「海洋基本法」、「領海」、「排他的経済水域(EEZ)」等がある。これらはすべて漁業者や海洋の専門家を育てるために必要かつ重要な項目である。ただし、新しい学習指導要領では教科「水産」の中で「海洋」についての取り扱いが増えている。

次に「湘南丸」は、1年生と2年生における体験乗船、3年生の3ヶ月乗船実習、専攻科生における1年3ヶ月の乗船実習で活用している。それにより教育効果が上がり、海上での体験学習にはなくてはならない重要な実習船であるが、老朽化（建造後14年）していることから神奈川県に対して代替船として新造船を要望している。

この他、教員研修費用におけるダイビング機材代が大きな負担である。これは、文部科学省の負担によって、セミナーの講師、インストラクター等の研修に直接的に必要な費用は賄うことができるが、ダイビングに必要となる機材及び旅費・交通費については県費によって負担しているためである。

1-6) その他

神奈川県全域、あるいは県外からの通学者が多いものの、現在の場所は近隣鉄道から大きく離れており、アクセスが悪く不便である。また、本校から長井実習場へのアクセスも悪く、学校がタクシーを手配して生徒を移動させる必要があることから神奈川県に対してマイクロバスを要望している。また、機材の運搬に必要なトラックについても要望している。

学校の予算規模は他の県立高校に比べかなり大きく、これらを配分して費用に充てている。

2) 個別カリキュラム・プログラムについて

2-1) 海洋科学基礎

2-1-1) 概要

海洋科学基礎は1年生後期で履修し、1単位²⁶を設けている。自然科学と社会科学を内包した内容で海洋について探究することを学ぶ。学校設定教科として設定している「海洋科学（専門）」のうち学校設定の原則必履修科目が本科目になる。

2-1-2) 対象と運営

高校1年生を対象とし、計156人が受ける。担当教員は1クラス1人で授業を行っている。

2-1-3) 教材・施設

本科目では自主作成教材を用いて行っている。教材については複数の教員により話し合っ

て決定する。本科目は、平成20年3月に竣工したマリンスポーツ実習棟1階にあるマリンスポーツ教室において実施している。

2-1-4) 外部との連携

課外授業として1時間半ほどの時間をかけて、JAMSTECの施設見学を実施している。その際に、移動手段として大型バスを貸し切る。JAMSTECにおいて、しんかい6500、地球科学館、水圧実験室等を見学するが、施設内の説明はJAMSTEC職員による。

2-2) 水産基礎

2-2-1) 概要

水産基礎は1年生前期から履修するものであり、4単位を設定している。

海上でカッター訓練を実施しており、波、潮流等について学ぶ。実習ではカッターを2艇から3艇使用し、監視艇として所有する2隻の和船も用いる。その他、湘南丸の体験乗船、水上安全、救急法等も扱っている。

2-2-2) 対象と運営

海上でカッターを用いて行う実習であることから、安全を考慮し、指導教員は各クラス4人体制としている。

2-2-3) 教材・施設

本科目は、教科書の他、カッター、船等を使用している。体験乗船実習は、相模湾において実施している。

2-2-4) 費用

カッター訓練で使用する監視船（和船）の燃料費とメンテナンス費用がかかる。

2-3) 海に関わるその他の活動

既に取り上げた活動の他に、体験乗船実習、海洋環境教育としてのアマモの移植、公

²⁶ 45分授業×40回を基本とし、およそ30～35時間程度の時間を確保している。

開講座、出前授業を実施している。

体験乗船実習は、教科「水産（専門）」の学校設定科目で、2年生を対象に1単位の扱いである。実習船「湘南丸」を用いて行っている（写真 2-25）。



写真 2-25 湘南丸の航行の様子

神奈川県立海洋科学高等学校 Web サイト (<http://www.kaiyokagaku-h.pen-kanagawa.ed.jp/>) より

海洋環境教育としてのアマモの移植は、長井実習場において実施しており、ミティゲーションを学習している。

公開講座として、中学生や保護者、幼児等を対象に「マリンスポーツ教室」を横須賀の芦名海岸において実施している（写真 2-26）。



写真 2-26 マリンスポーツ教室の様子

神奈川県立海洋科学高等学校 Web サイト
(http://www.kaiyokagaku-h.pen-kanagawa.ed.jp/NEWS/100824_koukaikouza/news.html) より

本校生徒を対象にした出前授業の実施として、東京海洋大学海洋科学部の協力を得て、年間1回から2回程度行っている。過去には「加温固定法による魚類骨格を用いた"からだ"の理解」等のテーマで開催している（写真 2-27）。



写真 2-27 出前授業の様子

神奈川県立海洋科学高等学校 Web サイト
(http://www.kaiyokagaku-h.pen-kanagawa.ed.jp/NEWS/090219_demae/news.html) より

3) 研修の派遣

夏期休暇を利用して、年間 1 回 1 人の教員を文部科学省の産学教育研修会として東海大学海洋学部へ派遣している。研修会は 1 週間から 2 週間程度で全国の各水産教育校から 1 人ずつ派遣されている。研修会では海洋について講義を受けるとともに、ダイビング、フィッシング等の実習も行われている。派遣は、教員の出張扱いとなる。